

## 里神楽

市川 修

正月の楽しみの一つは、たまたま参拝したお社で耳にした神楽の音であろう。

やっていないときと、やっているときでは、気分がまるでちがう。

横浜市港北区のある神社で聞いた笛太鼓の音色は、何年かもう過ぎてしまったというのに、いまだ自分の耳の奥深くで響いているような気がする。

地方の神社で催されるお神楽は、「里神楽」であって、宮中の「御神楽」から次第に全国各地に行きわたったのだという。宮中の御神楽の演奏をした官人たちは、京の大きなお社でも大体同じような演奏をしたそうである。それがさらに、諸国の受領たちの手で、全国各地の社で

盛んに演奏されたそうである。

いきさつはだいたいそのようなことだが、この里神楽はどういう趣旨で広まったのだろうか。

まず、上げられるのが、もつとも素直でまた受け入れられやすい趣旨としては、国家安穏と五穀豊穰を祈る素朴な祈りの心であろう。また、それがもつとも大きな理由であったに違いない。

だとしても、なお疑問は残る。大体において、祝詞やおめでたい日々に唱えられる祝言の類は、祈りであり期待である。つまり、今現在は「どうであれ」ということなのだ。

むしろ、不安な時代だからこそ、いつにもまして、華やかに舞い歌う、笛太鼓が待ち望まれる、のではなから

うか。

嘉保三年（一〇九六年）の夏に京都で発生した田楽の流行のことを永長の大田楽（えいちょうのおおでんがく）という。同年冬に元号が永長と改元されたため、一般的には「永長の大田楽」と称されている。

この大流行の原因として有力な説としては、嘉保三年（一〇九六年）三月に予定されていた松尾社の祭が穢れを理由に延期になったことに端を発する。直後から、松尾社の神が延期に不満を抱いているとの童謡が広まった。六月に祇園会が開催された頃から再び京都で田楽が流行し始め、京都市中のあちこちで田楽踊が見られるようになった。

大江匡房は『洛陽田楽記』に、「一城之人皆若狂（一城の人皆狂えるが如し）」と評している。

ところが、八月七日に媍子内親王が急死され、衝撃を受けた白河上皇が出家されると、熱狂的な田楽流行にも水を差され、急速に鎮静化していった。その後も、嘉承元年（一一〇六年）の祇園会をきっかけに再び田楽の流行があり、この際には参加者の中で武器を持つての乱闘も起きていることから、先の永長の時の媍子内親王急逝と白河上皇出家の件と合わせて、田楽の流行⇨下人濫行⇨政治的凶事の前触れとして受け止められるようになって

ていったようである。

里神楽は田楽や散楽を多様に吸収しながら今日まで及んでいる。芸能としての田楽はいつしか行われなくなり、散楽も紆余曲折をへて、能楽となった。ひとり里神楽のみが、正月の道行きを楽しませてくれる。

どうして、同じく神をも人をも振るわせた田楽はすたれて、里神楽は今の資本主義の社会のハザマでも続いているのだろうか。

随筆なので、思いつくままに書き並べてみることは許されるであろう。

里神楽が今日まで続いてきたのには、田楽とは違い、「神」楽である、という、民衆の無意識のけじめがあったからであろうと思う。里神楽にも、おかめひよつこの踊りはある。ぴいひやらぴいひやら、という笛の音は田楽のころに奏されたものと変わるまい。

それにもかかわらず、里神楽を奏すれば、そのお社の祭神がお喜びになり、鎮守の森は弥栄に栄え、氏子も繁盛してめでたい限りである、羽目はずしても敷居は越えるな、という無意識の約束事を、子々孫々受け継いできているからこそ、廃れず今あるのだと思うのである。

伊勢神道以降、神の教えという中世神道の特徴づける流れがでてきたが、それは、どちらかといえば魍魅魍魎

---

を恐れ、田楽で怨霊を吹き飛ばそうとした平安末期の民衆の激情が、かえって怨霊まつりである御霊会で制御できない動きになったことへの反省もきっかけとしてあったのではなからうか。

日本は正直清明の国で、和をもって本をなす、ということを正月毎に思い出せるということは、大変すばらしいことである。